

## にじ色のハーモニー

奄美市立朝日小学校 四年 伊集院 朋加

「あつ。またいた。」

教室のまどから外をながめると、黒と水色のも様がある、大きな羽のチョウが見えた。しずかにゆつくりと飛ぶ様子は、心を「ふわっ」とさせてくれて、なんだか気持ちいい。

あとで、お母さんに話したら、「それはアサギマダラかもよ。」と教えてくれた。

私は「ユウキ」という名前の小学四年生。『たくさん友達と一緒に、楽しく生きていくように』という願いをこめて、「友生」という名前になったらしい。だけど、現実には友達が多いわけでもなく、仲が良いといえる友達がいるわけでもない。

体を動かしたり、絵をかいたり、好き心おうせいで、大好きなことはたくさんあるが、特に音楽がとても好きで、小学三年生の時に吹奏楽部に入った。四年生になってから念願の楽器、クラリネットを担当することが決まった時は本当にうれしくて、こうふんした。みんなで心一つに演奏しているときは、とても楽しくて、心はずむ。

自分の気持ちのもやもやとか忘れてしまう時間だ。

そんな時には、なぜかいつもアサギマダラがふわっとあらわれる。そして、私が気づくと、かくれんぼをしてくれるかのように、私の周りをひらひらとしばらく飛びまわってどこかにきえていく。

「もう少しだけ、姿を見せてくれたらいいのになあ。」と、いつも残念に思う。

夏休みに入り、家族で金作原探検ツアーに出かけることになった。ポスターや映画のロケ地になったこともある、有名な場所なので、わくわくしていた。森へ入ると深い緑におおわれた別世界。いつも見ている景色とはちがう、ふしぎな世界があらわれた。写真でしか見たことのないヒカゲヘゴやクワズイモが大小の様々な高さで道をいろどっていた。

山道を歩いていると中に、わき水が流れていて、近くの小川にイボイモリを見つけることができた。どんなにもう暑で水不足になっても、この森の水はなくならないことにおどろいた。森全体がたくさん命の力であふれているのを強く感じる。

そして、じゅれい二百年といわれるブナの木の前に来てそのパワーを感じている時、いつも見かけていたあのアサギマダラがまいおりてきた。

「ようこそ。金作原の森へ。」

とチョウの姿が妖精の姿に変わり、私に話しかけて

きたのだ。思いがけず私は行動にでた。

「私は友生。あなたは誰なの。」

「私はミキ。あなたと同じで音楽が大好きなの。仲間をよぶから一緒に演奏してみない？」

ミキの言葉に私はうなずいていた。金作原の森の動物たちが次々とそれぞれの楽器を持って現れた。

まず最初に登場したのはアマミノクロウサギ。迫力のある音色のトランペットをひろうした。

体が美しいり色のルリカケスは、ギャーギャーという鳴き声をかくして、ゆうがにフルートを演奏した。

鳴き声が木管の音に近い、オーストンオオアカゲラは、クラリネットの担当である。私も同じ楽器を担当するので、少しきんちようしてしまった。

オオトラツグミは、とても愛きようがあり、かわいらしくさええずる姿が印象的で、ピッコロを担当する。

そんざい感ばつぐんのイシカワガエルやイボイモリも登場して、パーカッションでもり上げてくれた。

「カカカカカカ」

「チョロリン」

「パッパッパッパ」

まったく姿や個性もバラバラの動物たちだったが、しだいにミキの指きに合わせて見事なハーモニーを

作り出した。みんな音楽に合わせて自由に体を動かしたり、羽ばたいたり気持ちよく演奏する。

「この調子で、次は音楽発表会課題曲にちょう戦しよう。」

みんなで最高にもり上がってきた時、

「おい。友生ー。」

家族のよぶ声で、友生は現実の世界にもどっていた。空に雨が上がった後のように、きれいなにじがかかっていた。

夏休みが終わり、二学期が始まると、転入生が来た。

「美しく生きる、と書いてミキといいます。よろしくお願いします。」

私の心ぞうがドクンドクンとなっている。

「もしかして…。」

と、同時に、美生はにっこりとほほ笑んだ。